
エルフの森で食べるのは

構田 巧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エルフの森で食べるのは

【Nコード】

N4434V

【作者名】

構田 巧

【あらすじ】

ある日突然異世界に召喚された主人公。

お約束通り魔王を倒すようにと言われるものの主人公には全くその気がなく脱走、念願の異世界ライフを満喫するためエルフの森へとやってきた。

お腹が空いたので食事にとしようと思うも食糧がない。

異世界で食べる初めての食事は最高にファンタジーなものにしたいと思いつつ店に入ると……？

(前書き)

どうも、構田巧です。

気がついたら前回の更新から何カ月もたっていました。

自分のPNさえ忘れかけていましたけど、誰か僕のこと覚えてくれるんでしょうか？(笑)

さて、今回もオリジナルです。

プロフィール欄には『二次創作を中心に活動する』とか書いておきながらこの有様では詐欺でしょうか。

俺は森を歩いていた。

ただの森ではない。

深い深い森林だ。うっそうと茂る不気味な森ではなく、木漏れ日がおどるような気持ちのいい森。空気は澄み小鳥はさえずり、どこかで小川が流れる涼やかな音が聞こえる。

だが、この森の特別さはそんなところにあるのではなかった。

ここは異世界の森なのだ。

異世界召喚もののライトノベルを読みながら、常日頃から『いーなー、現実逃避してーなー。憧れるよなあ、異世界。テストもないし。最高じゃん、魔法とかドラゴンとか勇者とかかわいいヒロインとかかわいいヒロインとか』と念じてきた成果か、ある日突然目の前に謎の魔方阵が現れた。ものすごい力で魔方阵へ引き込まれたかと思った次の瞬間、そこはもう見知らぬ王宮だったというわけだ。

国王からは『世界を脅かす魔王を倒してくれ。そのために俺を召喚したのだ』と説明された。

お約束どおり俺には謎の主人公補正がかけられているようで、でたらめな身体能力をはじめとするこの世界で生きていくための様々なスキルを手に入れていた。

俺はもちろん首を横に振った。

夢にまで見た異世界だ、ぶっちゃけ観光を優先したいと言ったら初老の国王は両手で顔をおおって泣いてしまった。

魔王など知ったことか。勝てるわけがないし。俺、演劇部だし。段ボールとアルミホイルの剣しか使ったことないし。

気がすんだらまた来ますよ、とひとこと国王をなぐさめて俺は王

宮から走り去った。

俺の目的は観光だったが、立ちふさがる衛兵を突破できる程度には主人公補正は便利であった。それが昨夜の事である。

そうして今、俺は王国西部に位置するエルフの森を歩いている。興奮のあまり夜通し歩いたせいも、少々疲れが出はじめていた。

「そろそろ食事にするか」

この世界に召喚されてから初めての食事だ。なんだかよくわからない形をした果実とか、謎の声をあげる獣の肉とか、最高にファンタジーなものを食べてみたい。

「……あれ？」

と、そこまで考えて気がついた。

「あー、王様から食べ物ももらってきてないな……」

うかつだった。路銀なら国王の話の途中にわたされていたけれどこんな森では使い道がない。

いったん森の入り口にあった小さいな農村まで戻るかどうか悩んでいると、おいしそうな匂いが俺の鼻をくすぐった。

見ると、五メートルほど進んだ先に簡素な造りの小屋があった。

まるで妖精が住んでいそうなそのログハウスは家だろうか、それともお店か。どうやらおいしそうな匂いはそこから漂ってくるようである。

俺は空腹に耐えかねて、そこで何かごちそうしてもらうことに決めた。

十

遠目からではわからなかったが、近づいて見ると扉の隣に小洒落た看板がかかっていた。看板はエルフの言葉で書かれていたが、大丈夫、ご都合主義な主人公能力でどうにかなった。

看板によるとどうやらここは飲食店らしい。が、何を売っているかはわからなかった。

腹の底から絶叫した。

「何だよこれ、イジメかよ！ いやもちろん大好きですよ！？ 大好きですよマクドナルド！ チキン竜田が復活した時なんて思わずガッツポーズとかしましたよ！？ でも今はア、料理名をまとも

に発音することもできないような得体のしれないシロモノの方が何百倍もうれしいんだよオオオオオオオオオオオオ！」

俺は天を貫く勢いで頭上を指さした。
「なんなんだよ！ なんだよこれ！ なんでAKB流れてんだよ！ いねえだろこの世界に！ 『会いたかったー会いたかった』ってそんなもんより俺はドラゴンに会いてえよこの野郎！」

俺は頭を抱えてじだんだ踏んだ。

「嘘だつ！ こんな嘘だ！ こんなことなら素直に魔王たおす旅にでてた方が楽しかったかもしれない！ いやいつそ俺が魔王になつてこの世界を滅ぼしてやる！ マックなんて燃え尽きる！ ハンバーガーの灰で雪合戦してやるよこんちくしょう！」

肩で大きく息をついてお姉さんを視線で貫いた。完全にノーダメーじだった。接客のプロだった。

「……はあ」

待て、冷静になれ。

とりあえず落ち着けばきつとどうにかなる。

大丈夫、ここは異世界で俺は主人公。最終的にはうまくいくようにできているはずだ。

俺は大きく深呼吸して、あくまで冷静に切り出した。

「あの、このマックにはマック的なものしか売ってませんか」

「そうですね、マックなので」

「なんでもいいんです。普通は売ってないようなものがあればうれしいんですけど」

お姉さんは小首をかしげて少しだけ考えるそぶりを見せた。

「そうですねえ、こういうのはどうでしょう」

「なにかあるんですか」

「はい。ふつうは頼まないようなものが」

俺は目を輝かせてその話に飛びついた。

「お願いします。ぜひとも」

「はい。かしこまりました」

そういつてお姉さんは満面の笑みを浮かべた。

いったい何が出てくるのだろう。

ありふれた風景の中で食べるフシギな食事……。そう考えると異世界でマックというのも悪くはないかもしれない。

「……」

だがしかし、俺の期待とは裏腹にお姉さんは一向に動こうとしなかった。

「あの……そのふつうは頼まない何かというのがほしいんですが」

「はい」

「用意してもらえませんか」

「これですよ」

「スマイルですか」

「そのとおりです。マックですから」

「すみません。はてしなくいりません」

「プライスレスですよ」

「いらねえよ！」

たしかに誰も頼まないだろうけど！俺が求めるものはそういうものではない！

「そうではなくて、俺がほしいのは異世界的な何かです」

するとお姉さんはあごに手をやりふたたび考え始めた。

「そうですね……。ああ、あれがありました」

手のひらを胸の前で合わせてにっこりほほ笑むお姉さん。

「なにかあるんですか」

「はい、あれならきつと気に入っていただけだと思いますよ」

そう言つとお姉さんはその場にしゃがんで、カウンターの陰で何やらごそごそやりだした。とても上機嫌だった。周りには音符がお

どっているようである。

お姉さんがそこまでいうのだから期待していい……のだろうか？
それでもさっきのことがあるし、あまり期待しないで待つことにしよう。

いや、でもここはマックである前に異世界なのだ。そのところを忘れてはいけない。俺が元いた世界チックなものがそうそうたくさんあるとは思えない。

そう考えると、自然と俺の中のうずうずが大きくなっていった。

「これなんです……」

よつやくお姉さんが立ち上がった。

その手には薄いフィルムで包装されたつけ耳のようなものがある。
ている。

「一〇〇円シヨップで手に入りそうな、安っぽいつくりの品である。
パーティーグッズか何かだろうか。」

「あの、これは……」

にっこにこしながらお姉さんは言う。

「エルフ耳です」

「ふざけんなッ！」

俺はお姉さんの手からエルフ耳を叩き落とした。光速が出た。主人公補正は便利である。

たしかにせめて店員さんがエルフだったりしてくれればなあって
ちよつとだけ思ったけど！ でもつけ耳ってなんだよ！ 異世界感

ゼロだよ、むしろマイナスだよ！ チープなバラエティ番組かよ！

「おかしいですね。子供はみんなハッピーセットが好きなのに」

「それおまけかよ！ つか俺が小学生に見えんのかッ！」

「四五〇円になります」

「買わねえよ！」

俺は打ち捨てられたエルフ耳を拾い上げ、怒りのあまりうっかり
握りつぶしそうになるのをこらえながらお姉さんに差し出した。

「すいません。返品お願いします」

「飲食店で返品だなんて」

「だったら飲食店らしく食べるものを出しなさい！」

「それではハンバーガーを」

「意味ねえよ！」

「えへ」

「スマイルいらん！」

ぐしゃりとエルフ耳がひしゃげた。

「いいから返品、返品ですよ！ 何でもかんでもいっさいがっさい何から何まで返品です！」

するとお姉さんは急に表情をくもらせて、

「そんなこと言われたって……、ここはマックですし……」

「あ、あの、お姉さん？ 急にどうしたんですか？」

目じりに涙をためてつぶやくお姉さん。

俺はうるたえることしかできない。

「異世界っぽいものって言っても、ここにあるのはどうせマック的なファーストフードだけ……。それなのに私にどうしろっていうんですか……」

涙交じりの声色でそういうと。お姉さんは両手で顔を覆って静かに泣き出してしまった。

さすがにこれは気まずい。店内の空気が重すぎる。

勉強中の学生なんかはこちらの様子をうかがって、あからさまに

「あー、やっちゃったー……」みたいな顔をしていた。ちくしゅう。

「あー……。すみません、言い過ぎました」

こうなるともう平謝りルートを突き進むしか道はなかった。

「お姉さんもいろいろ頑張ってくれてたんですよね？ 俺はとんだクレーマーでした。謝ります」

「うっ……」

それでも一向に泣きやまないお姉さん。

「確かに無茶を言いすぎましたよね。ここマックですもんね。マックに入ってはマックに従えって言いますもんね」

「うっつ……」

「わかりました！ 俺もうごちゃごちゃ言いません。マツク的な何かを食べようと思います。だからお姉さん泣きやんで？」

するとお姉さんは涙で瞳をうるませながら上目づかいで俺を見た。「ひとつだけあるんです……、これならぜったい大丈夫っていうものが」

「え、いや、無理しなくていいですよ。俺ベーコンレタスバーガーが食べたいなあベーコンレタスバーガー」

「いいえ、お客様のご希望にはできる限り応えなければいけません」お姉さんは少々お待ちくださいと言いつつ、店の奥へと消えて行った。

「大丈夫……なのか？」

十

数分後、晴れやかな表情で戻ってきたお姉さんの手には、何やら古めかしい羊皮紙が握られていた。

「見てください」

カウンターの上に広げられたそれに書かれていたのは、エルフ語だった。

いくつかの単語が書かれた後に数字が続く。それが数行にわたって繰り返されていた。

主人公補正でエルフ語が読めるとは言っても、それは英語に例えるなら『apple』を『アップル』と読めるといっただけで意味が分かるわけではない。看板にあったような簡単な単語ならまだしも、これはさすがに読めなかった。

「お姉さん、これは？」

「とても異世界っぽいでしょう？ 隠しメニューなんですよ」

お姉さんは満面の笑みを浮かべた。

「おおお……！」

まるで美しい花が咲き乱れるような文字で書かれた料理名……。これは、いけるっ！

「これこれ！ これですよお姉さん。こういうのが欲しかったんですよ！ あるじゃないですか異世界チックー！」

「喜んでいただけただよふなによりです」

何ともいえないわくわくが胸をくすぐり、自然と顔がほころぶのが分かる。かじりつくように隠しメニューを眺めまわすと、俺のテションは天井知らずが上がっていった。

「どれにしようかなあ。悩むなあ。あ、いや読めないけど。完全にフィーリングに任せるしかないけど。あはははは。そうだ、オススメとかってありますか？」

「そうですねえ。これなんかどうでしょう」

そう言ってお姉さんが指さしたのは、メニューの一番上に書かれている商品だった。

なるほど、一番上に書いてあるのなら人気商品である可能性も高い。

「どういう食べ物なんですか？」

「この料理の名前はエルフ語で『薄いパンで肉をはさむ』という意味です」

「へえ……それはおいしそうですね」
想像してみた。

ハンバーガーだった。

「ハンバーガーじゃねえかッ！」

「えへ」

「だからスマイルはいらねえって！」

「……お気に召さなかったでしょうか？」

「あ……」

見るとお姉さんは半泣きだった。非常にマズい。

「……」
「思ったけどやっぱりハンバーガー食べようそうしよう、うん！ というわけでその『薄いパンで肉をはさむ』一つ下さい今す

ぐに」

お姉さんは涙のあとの残る顔でえへへと笑って、

「実はもう用意してあるんです」

「それはありがたい……」

てことはこの人、俺が『薄いパンで肉をはさむ』に満足すると確信していたということか。恐ろしい子っ！

「どうぞ」

「はい、ありがとうございます」

ハンバーガーを受け取って、俺は空いている席に腰を下ろした。

「はあ」

なんだかどつと疲れた気がする。正直ここまでの道中よりもこの店に入ってからの方が疲労度は高かった。

「結局ハンバーガーかよ」

手早く包装をとってしげしげと眺めてみた。

何度見てもやっぱりただのハンバーガーだった。

一口かじった。

「……」

まあ、なんだ。

結論から言ってしまうば。

やっぱりマックはどこで食べても美味しいのだった。

(後書き)

お楽しみいただけただけでしょうか。

こんなラストは初めてだったのでちゃんと落ちているかどうか不安ですが。

次こそは二次創作を書きたいです！

それではまたいつかお会いしましょう。ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4434v/>

エルフの森で食べるのは

2011年8月4日03時25分発行